

明治初期における歌論の独訳

BRUNO LEWIN*

現在は日本文学がヨーロッパに知れ渡ったという状況になったとはいえな
いと思います。明治維新を見ると、西洋人は日本文学をほとんど全然知らな
かったのです。従って日本の歌がどんなものか分かりませんでした。和歌の最
初の翻訳の話ならば、『百人一首』という歌集が慶応2年 Dickins によって英
訳されたが、12年後 Léon de Rosny がそのフランス語の翻訳をだしました。
ドイツ語の『百人一首』は明治32年になって初めてあらわれました。これを
考えると、すでに明治6年に古い歌論書の翻訳ができたのは、本当に驚くべ
きことだと思います。この翻訳はオーストリアの東洋学者の August
Pfizmaier の作ったものです。私の今日の話は、この大体忘れられてしまった
著作についての説明でございます。でも、その前に日独文学交流史に関して
貴方がたの思いだされるように少し話したいと存じます。

日本とドイツが相互のことを知るに至ったのは直接の見聞によることでは
なく、又聞きによることでした。マルコ・ポーロの13世紀の終りの有名な旅
行記が1477年に独訳されました。日本についての信頼できる情報はイエズス
会宣教師とオランダ商人を通して16世紀半ばからヨーロッパに至るようにな

* BRUNO LEWIN 〔現職〕 ルール大学教授
国文学研究資料館客員教授（但し'82年2月末日まで）

りました。彼らの報告は、1649年のドイツ人地理学者 Bernhard Varen (Varenius) によるラテン語の『日本国誌』(Descriptio Regni Japoniae) の基礎となりました。その後ドイツの探険家 Engelbert Kaempfer は1690年から1692年にわたる出島滞留後、有名な著作『日本の歴史』をものしました。原文はオランダ語で、1727年には英訳が、50年後には独語版『日本の歴史と記述』(Geschichte und Beschreibung von Japan) ができました。この本は、はるかかなたの島国である日本についての実記録として長い間一番よく読まれたものでございました。

日本の文学作品の独訳として最初のもは Kaempfer の125年ぐらい後に日本に滞在したドイツ人学者が切掛けを作りました。名高い Philipp Franz von Siebold のことです。これは1830年に日本を追われ、住居と定めたオランダに多くの日本語の蔵書を持って行ったのです。1835年にシーボルトはオーストリアを訪れて、ウィーンの宮廷図書館に対し感謝の印として辞典や文学作品を含む60冊ほどの書籍を寄贈したのです。これらは、1843年以来ウィーン大学で教えている東洋学者 August Pfizmaier (1808—1887) が日本語を勉強するのに、その拠所となりました。この学者は大変な才能に恵まれて、非常に勤勉でもありました。主として上記のシーボルト寄贈本を元に独学で日本語をものにしたのです。また日本の考古学、歴史、言語、文学についての論文を60編以上も書きました。これら業績の大部分は原典翻訳で、他は原典研究に基づくものでした。彼の手によって日本の文学作品の最初の独訳がなされたのです。1847年にウィーンで出た、柳亭種彦の合巻物『浮世形六枚屏風』(1821) の訳が (Sechs Wandschirme in Gestalten der vergänglichen Welt) それでした。これは同時に、日本の文学作品の西洋語への翻訳としても総じて最初のものでした。ウィーン宮廷図書館のシーボルトの寄贈本の中にありましたが、文学史上はそれほど重要ではないこの原本は、Pfizmaier によって「原文による日本の小説、版画57枚の模写を含む」と銘打って、ドイツ語の翻訳と共に公刊されました。後はこの独語版の「改訂版」がベルリン

で A.R. Meyer 氏の手によって新たに出版されました（発行年無記載）。Pfizmaier は同じ著者の合巻物をもう二作訳していました：『笹色猪口曆手』（原文1826、DAW1868）と『正本製』（原文1825、DAW1870）これであります。外に Pfizmaier は曲亭馬琴の多数の読本の中から『雲絶間雨夜月』（原文1808年、SAW1876～1877）と『常夏草紙』（原文1810、DAW1877）を独訳していました。江戸時代の説話集『新著聞集』（1749）にも手を付け、数箇所を訳出しました（SAW1879）。Pfizmaier は文献学者として作品をできるだけ逐語的に、かつ日本語の文の組立に沿って訳したので、これらの独訳は読むのが容易ではありません。これは彼の数多くの翻訳総べてについて当てはまり、和歌の翻訳となれば、特にはなほだしい。Pfizmaier はまた古事記、日本書紀、万葉集、枕草子、伊勢物語という古典文学からも抜粋訳をしていました。『和泉式部日記』の全文を独訳しました（DAW1885）。徳川光圀編さんになる大部の文集、『扶桑拾葉集』（1689）からは多くの箇所を取り上げていました（SAW1871、DAW1880、更級日記の翻訳を含めて）。Pfizmaier の仕事は大部分がウィーンの学士院の会報や覚書に発表されたためもあって、ほんの少数の読者を得たにすぎなかったのです。しかしながらこの学者が、当時の少ない道具立てにもかかわらず、彼の後二度とは行われていないような驚くべき訳業を成し遂げたことは明記しておかねばなりません。例えば、江戸時代の戯作文学は、井原西鶴を別にすると、第2次世界大戦後ようやく西洋で訳されるようになったのです。

ここに Pfizmaier の経歴を詳しく述べれば、おもしろいかも知れませんが、略して話すと、Pfizmaier は現代のチェコスロヴァキアの Karlsbad 市に生まれて、Pilsen 市で育てられて、学校時代から外国語に興味を持って大学に入学してから、東洋語を勉強しました。1838年にウィーンへ引越した後、全くシナ語と日本語だけを学んでおられました。ウィーンで50年間ほど文献学者として従事しましたが、その研究の中心は日本学でした（Pfizmaier について詳しいデータをお探しになるなら、ウィーンで5年前に出版された『オー

ストリアにおける日本研究の歴史的な概観』という本を参考に使うほうがいいと思います。その外は「ボーフム東亜研究年鑑」に Pfizmaier の文献目録が出版される予定があります)。

Pfizmaier の学問上の活動の重要な部分は日本の歌と深い関係があります。その外にアイヌ叙情詩も研究しました。ついでにいうと、Pfizmaier はヨーロッパのアイヌ研究の先駆者で、今までもその寄与は学問的な価値のあるものです。Pfizmaier の和歌に関する研究を見ると、初めに「古代日本の歌についての考察」(Beitrag zur Kenntnis der ältesten japanischen Poesie) というテーマについて、1849年にウィーンの学士院で講演しました (SAW 3、1849)。その次のものも同じくウィーンの学士院で紹介されました。御記憶の通り、ウィーンの宮廷図書館にシーボルトから贈られた和本が色々集めてありました。Pfizmaier はその中に古事記と万葉集の一部を見付けて、これを使って古代歌謡を勉強してから、上に述べた講演を作りました。3年後にその講演の続きとして「日本民俗歌謡の特質の二三について」という論文を出して、短歌と長歌との歌体を説明してみました。1872年、すなわち20年後、万葉集のドイツ語の選訳を出版しました (Gedichte aus der Sammlung der 10 Tausend Blätter, DAW1872)。全部で、13首の長歌を含めて、215首の翻訳です。この独訳は大変な業績で、特に万葉集の註釈書がその時にウィーンにまだなかったからです。

後にも Pfizmaier は和歌をたくさん翻訳しました。『枕の草紙』(1875)『伊勢物語』(1876)『和泉式部日記』(1885)などを独訳するとき、その中の和歌も訳しました。別に日本歌論を研究して、Pfizmaier が歌論に含まれていた和歌をたくさん翻訳しました。

これらの歌論の研究が、今日のテーマの中心であって、次のものです：「日本語の叙情的な表見」(Die poetischen Ausdrücke der japanischen Sprache) と「てにをはに関する教え」(Die Lehre von dem Te-ni-wo-fa)。両方は1873年にウィーンの学士院での講演に基づいて発行されました (DAW 22, SAW

74)。ヨーロッパにおいては歌論に関する説明として本当に古いものであります。といえども、一番古いのはポルトガルの宣教師ロドリゲスの『日本大文典』に含まれている「日本詩歌について」という論文です。ロドリゲスによれば、一方では支那から来た「詩」(Xi)と「聯句」(Rengu)であって、他方では本来の日本の「歌」(Vta)と「連歌」(Renga)があります。両方を取り上げて、細かいところまで歌を説明しました。第一に日本の韻文について書きました、歌・歌道・和歌の道ということばを紹介してから、歌の構造を説明しました。五七調・上の句・下の句・字余りなどの和歌の概念に関して詳しく書きました。『発心集』から取った短歌を以って、和歌の特質を解釈しました。ロドリゲスによって、「歌」は3種に分けられます、即ち「長歌」・「短歌」・「小歌」(Covta)、これです。その次に歌の題を扱って、四季の歌と雑の歌を紹介して、各時節の題材を詳しく挙げました。たとえば、春について梅・桜・鶯・霞・青柳・春雨などの季語を挙げます。次にその記述は雑の題材にも触れます。歌の例をいろいろ挙げまして、大体『古今集』と『和漢朗詠集』から選んだものです。ロドリゲスの歌論は実に理解しやすく明らかな説明であります。三百年後になって Aston は『A History of Japanese Literature』(1898、ロンドンで出版された本)で割合に印象的な和歌の説明を見せていました。しかし、両方を比べると、ロドリゲスの記述は資料上も構造上も詳細なほうで本当にヨーロッパにおけるもっとも古い歌論だといえます。ロドリゲスはその論文を書くのにどのくらい中世日本の歌論に基づいたか、文献によったか口述によったか分かりませんが、歌集から取った例の歌を見れば、たしかに文献も使ったらしいです。その外は『日本大文典』の第2巻の終りに、中世歌論のいろいろを「更に考究したい者の為に」書いています。つまり『竹園抄』(Chicuyenxô)・『歌林好材抄』(Carincōzaixô)・『秘伝抄』(Fidenxô)・『至宝抄』(Xifūxô) これです。秘伝抄と至宝抄は連歌の作り方を説いたものです。従ってロドリゲスは日本の歌論書を、九州に滞在したとき、自分の目で見たことがあると思います。

話がわき道へ逸れて、失礼しましたが、今は歌論についての、明治初期に現われた、Pfizmaier の作った独訳に戻って来ます。もう述べたように、Pfizmaier は1849年に初めて古代日本の歌を取り上げて、その題材をドイツ語で例示しました。ロドリゲスの『日本大文典』にも歌論が入っていて、Pfizmaier もその文法本をよく知って、1853年と1854年とこれについての評論を出しました (SAW 11、12)。ところが、「Arte breve da lingoa Japoa」という略した文典に基づく「Éléments de la grammaire japonaise」(1825)のフランス語の形で知りました。その『日本大文典』の概略には和歌についての部分がありませんでしたので、Pfizmaier の評論もロドリゲスの日本文法の説明を批判するのに過ぎなかったのです。後にも Pfizmaier はロドリゲスの歌論に関して一言も述べませんでした。全然独立に日本の歌論を勉強してから、初めて歌論を一つ外国語に翻訳しました。その原典はほとんど忘れられた江戸時代のもので、題名は『和歌呉竹集』というものです。江戸時代の歌論書の多数の一つですが、『日本歌学大系』にも『和歌文学大辞典』にも現われないのです。随分古い『増訂国書解題』には『和歌呉竹集』についてつぎのように書いてあります。『和歌の詩類を挙げ、いろは順に配して一々説明したるものなり。また和歌の読み方等にも記す。寛文13年(1673)出版す。尾崎雅嘉が寛政7年(1795)の序を附して、2冊に出版したるものもあり』というのです。これによると、同じ題名のものが二つあります。両方とも『国書総目録』に挙げられます。雅嘉の序言の付けてある2冊のものは、知られない著者の古い1冊のものに基づいたかも知れません。Pfizmaier は2冊の『呉竹集』即ち寛政7年のものを使いました。自分の序にもそう書いてあります。名を「Waka-kuretake-atsūme」と付けて述べましたが、尾崎雅嘉の序に触れておりません。その雅嘉は大阪に生まれた国学者で『群書一覽』という文献解題書を寛政時代に作って有名になったが、歌論についてもいろいろ書きました。明治時代までよく読まれましたが、後は大体忘れ去られました。ですから明治25年には『呉竹集』が活字版でもう一度出版されましたが、そ

の後の出版がないらしいです。

『和歌呉竹集』という歌論書に関しては Siebold の天保元年 (1830) 日本から帰国したとき、その作品も持って行って、オランダの Leiden 大学の図書館に入れました。Leiden 大学で Siebold と同じ故郷の Würzburg に生まれてその弟子になった Johann Joseph Hoffmann が 1855 年から日本語を教えて日本文法も文学も研究しました。Hoffmann は『和歌呉竹集』を図書館で見付けて、読んで見てから、自著の『日本語の研究』(Japanische Studien, 1878) という本にその内容に関して「おかしく整理された単語集」と述べました。Pfizmaier と知り合って、その「単語集」を貸してから、かれはその本を部分的に独訳しました。序言には Pfizmaier が次のように書きました：「此の論文の中で執筆者は古い言葉の辞書にも又今まで知られたどの著作にも載っていない日本語の詩歌的表現を多く集めています。これらの表現の中にはすでに知られた言葉ではあるが、新しい意味を付けられたものもあり、或るいはまだ知らなかった言葉であって、それ自身単独で又は他の言葉と組合わせて詩歌的表現として独特なものもあります。その内容は例えば歌人達によって描かれた奇抜な譬喩的な表現が引用された箇所などもあって日本学が専門でない人達にも興味が少なくありません」という序言です。

『和歌呉竹集』は本当に歌題辞典みたいなものです。たとえば、い部には「いろ・いは・いにしへ・いほ・いへ・いと・いち・いり・いを・いか・いた」などとその複合語の歌題も集めています。Pfizmaier はそのいろは順に整理された歌題集を選択してローマ字で写して、漢字をそのままに入れて単語と文句を逐語的に翻訳しました。そのやり方を示すために「色草」という見出し語を例として上げます。

「色草 *iro-kusa*. ‚Verschiedenartige Pflanzen‘. *Aki nari. Kusa-gusa-no kusa-wo iû*. ‚Ist der Herbst und bedeutet verschiedenartige Pflanzen‘. 種 *Kusa-no zi-wo-mo kaku-nari. Kusa nigori-te jomu-besi. Mata iro-tori-to-wa iro-iro-no tori-wo iû. Kore-mo aki nari*. ‚Man schreibt auch 種 *Kusa*,

Gattung, Art. *Kusa* soll trüb gelesen werden. Auch *iro-tori* bedeutet verschiedenartige Vögel. Es ist ebenfalls der Herbst‘.]

『和歌呉竹集』という歌論書の独訳のあったことは偶然のいきごととともに学者の勤勉によるわけです。偶然というのは、この原本は Siebold の木版蔵書として Hoffmann のかげで Pfizmaier の手に渡ったからです。「学者の勤勉」というのは、Pfizmaier はその本を訳したら、日本の詩歌の問題点を解決するための参考になりえると思ったからです。でも実はその役に立ちませんでした。

これから Pfizmaier の『和歌呉竹集』の付録である「てにをは大概」というものの研究について話したいと存じます。本当におもしろいもので、歌論にも文法論にも関係があるといえるものです。日本では両方の分野は伝統的に親密な繋りがあります。

Pfizmaier は「てにをは大概」を別の翻訳で取り上げました。「Die Lehre von dem Te-ni-wo-fa」というものです (SAW74)。その前書きに次のように解題しました。

『てにをは』というのは日本語において使われるかなり多くの不変化詞をいいます。上の「てにをは」という音韻はこの不変化詞に数えられてその例として挙げるので名称になりました。てにをは（又略して、てには）の研究は日本では重んじられて単語と単語の組み合わせの勉強にも古典文、特に詩歌の理解にも大切なものです。筆者の書いたこの「てにをは論」は以前に言及した書籍「Waka-kuretake-atsume」に付録として載ったもの「てには大概」(Das Te-ni-fa im Allgemeinen) に従って説明したものであります。此の付録に出て来る説明は我々の文法書に納められたものより徹底的でより広範囲でもあり、又説明の新しいもので今までのとは違ったものもあります。ですから此の研究は今日尚充分解明され尽さない日本語の特徴のいくつかを完全に把握するのに役立ちます。』というのは Pfizmaier の前書きです。彼の述べたように「てにをはの研究は日本では重んじられて、特に詩歌の理解に大

切なものである」という意見は本当なので、「てにをは大概」も歌論と同類の一部分として認められます。『国語学書目解題』によれば、『和歌吳竹集』（そこの読方は「ごちくしふ」です）の末に「別に発句切字之事といえる條」があります。これは寛文13年の10冊の『吳竹集』の付録を指して、寛政7年の2冊本に比べると、別のテキストなので、その内容と構造を見れば、「てにをは大概」の模範になったのは本当らしくはありません。

その大概の初めに、Pfizmaier の読み方によって、次のように書いてあります。「*Kano te-ni-fa-wa Kan-bun-no* 焉 *jen* 哉 *sai* 乎 *ko* 也 *ja-no sūke-zi-no gotoku-nite uta-no uje-sita-no ikiwoi-ni-jorite sono kokoro sama-zama tagō koto aru-besi. O-oku inisije-uta-wo soran-zite notsi-ni sono tamesi-wo akirame-siru-besi.* „Das Te-ni-fa ist gleich den Hilfswörtern *yen, tsai, hu* und *ye* (wie oben) der chinesischen Schriftstücke. Je nach dem hohen oder geringen Ansehen des Gedichtes kann seine Bedeutung auf mancherlei Weise verschieden sein. Wenn man häufig alte Gedichte auswendig hergesagt hat, kann man die Beispiele deutlich erkennen.‘」

ご存じの通り、「てにをは」という概念は漢文の読み下し文から出たものです。初めて平安末期の万葉集の難訓を解釈する『袖中抄』に現われて、「助け詞」あるいは「休め詞」として働くという説明がありました。順徳院にも『八雲御抄』の特別な條に「てにをはということ」を取り上げられていました。後は多くの歌論にも連歌論にも「てにをは」が大きな役割を演じております。『下官集』『悦目抄』その他が上げられますが、『手爾葉大概抄』には初めて学問的な取り扱い方が出て来ました。中世の連歌論にも「てにをは」はよく現われて、2、3の例をロドリゲスが『日本大文典』に取り上げました。

文法的な立場から見ると、中世の歌論に出て来る「てにをは」は助詞と助動詞と用言の活用語尾とその他も含まれています。江戸時代に入ってから、その研究が体系的になります。宣長の『詞の玉緒』と成章の『脚緒抄』がその傑作だといえます。

今の「てにをは大概」については、助詞と助動詞が30個ぐらい集って、その働き方が説明してあります。「てにをは」ごとに和歌の例を2、3挙げて解釈が付けてあります。

Pfizmaierはその文章をローマ字で書き換えて翻訳しました。例えば、「や」という助詞について次のように書いてあります。

「*Ja-wa utagai-no te-ni-fa nari. ka-jori-wa jurujaka-naru kokoro nari. Motto-mo fito-kasira-no jomi-jō-ni jori-te sukosi kokoro-kawareri.* „Ja ist ein Te-ni-fa des Zweifels. Aus diesem Grunde hat es den Sinn von *jurujaka-naru*, langsam. Eigentlich ist es je nach der Lesart eines Stückes von Sinn ein wenig verändert.“

その後は短歌の9首を以ってその「や」の機能を直観的に説明しておきます。例えば

「*Tsūma-gofuru sika-zo naku naru womina-fesi wono-ga sūmu no-no fana-to sirazū-ja.*

„Der die Gattin bittende Hirsch eben schreit. Dass der Baldrian eine Blume des Feldes, auf dem er wohnt, weiss er wohl nicht.“

次に特別の機能のある「や」の説明が続けて来ます。「Mono futa-tsu narabete jomu toki-ni motsijuru ja」(Das Ja, welches man gebraucht, wenn Dinge zu zweien nebeneinander gestellt werden), 「Negō kokoro-no ja」(Das Ja von der Bedeutung des Wünschens), 「Fito-kasira-wo jasūme-taru ja」(Das Ja, das einen ganzen Abschnitt ruhen liess), 「Osi-fakaru kokoro-no ja」(Das Ja im Sinne der Vermuthung), 「Ki-ja-to tomuru ja」(Das als ki-ja aufhaltende Ja), 「Uje-ni woku ki-ja」(Das oben gesetzte ki-ja) などがあります。

Pfizmaierはその書き換えと翻訳には自分の意見か批判か聊かも付けませんでした。それにもかかわらず「てにをは大概」の独訳はヨーロッパにおける日本学の重要な業績だと思えます。

今までその外の「てにをは」研究史に関する作品は外国語に翻訳されませんでした（現在はチューリヒ大学で『脚緒抄』についての卒業論文ができました）。ただ俳論に関して謂ゆる切字の問題に関する論文がドイツの日本学にいろいろあって、芭蕉の俳論に関して書いたものです。

Pfizmaier のてにをは研究が同志の Leiden 大学の Hoffmann 教授の注意を引きました。御記憶の通り、Hoffmann が Pfizmaier に Leiden 大学の蔵書から『和歌呉竹集』を貸して上げました。Pfizmaier の独訳が出てから、Hoffmann はこれを自分の研究の起点として使いました。その研究は「日本語の問と答、詩歌を中心として」というものです（Über Frage und Antwort besonders mit Rücksicht auf die japanische Poesie. Japanische Studien, Leiden 1878）。Hoffmann はその論文の初めに次のように書きました。『学識豊かで弛みないシナ語及び日本語の翻訳者である我が友達 Pfizmaier 教授が1873年ヴィーンで上に言及した「てにをは大概」の翻訳を發表しました。この翻訳は逐語的で、あまりに逐語的なので、私自身は翻訳された箇所とそれに相当する日本語の原文とを照し合わせて見てから、初めてやっと分るところがたくさんありました。こういうことの原因はその翻訳の仕方にあるのでしょうか。本当のところですが、日本人自身でさえ屢々風変りな、時にはへまな言い方をします。しかも日本語をあまりよく知らない外国人が如何にして翻訳された箇所にぴったり当たる日本語の原文を捜し当てられましょうか。（略）私の遺憾とするのはどの他の専門家よりも優れた知識を持っている筈の此の人が原著者に対する註釈をも批判をもせずして、ただ直訳するしかないものです』。

これは日本人の表現法と Pfizmaier の翻訳法に対して本当に強い批判の言葉です。その「問と答」に関する研究で Hoffmann は反語助詞の「や」を取り挙げています。「や」という助詞の反語法を説明して、Pfizmaier の翻訳した「てにをは大概」から短歌の40首ぐらいを利用して、その原文を自身で独訳しました。両方の翻訳を比べると、Hoffmann の方は理解しやすく、

短歌の意味によく合うものだと直ぐ分ります。たとえば「ましや」という條を Pfizmaier の翻訳とともに上げると、次のようになります (SAW74, p. 349)。

「*Kore-wa wosi-kajesi-te miru kokoro aru nari.* ‚Hat den Sinn, dass man eine Sache gerade als das Gegentheil betrachtet.‘

Kefu-wa kozū-wa asū-wa juki-to-zo Kije-namasi kijezu-wa ari-to-mo fana-to mi-masi-ja.

‚Wenn es heute nicht kommt, morgen als Schnee wird es zerschmelzen. Dass es nicht schmilzt, kommt auch vor: wird man es als Blume seh’n?‘

Hoffmann は此の所に関して次のように書きました。『日本の註釈者の見方に従えば「やと止りて心の上に回る有り」即ち一つの文を「や」で終結すれば、言い尽す代りに取消しということであり、言ったところの反対を言はんとするのを意味する。Pfizmaier の此の「や」の翻訳で「やで止め終った文は意味上もとに戻って来る場合がある」(Es kommt vor, dass bei dem Stillstehen mit 'ya' der Sinn nach oben zurückkehrt)というのですが、これは明確な説明が否かという質問には私は返答しかねます』。この次に Hoffmann はその短歌の自身の翻訳を対照しております。「Was heute nicht kommt (noch nicht gekommen ist), kann morgen schon wie Schnee wegschmelzen. Und tritt das Schmelzen auch nicht ein, sollte man es für Blüten ansehen? Antwort: Nein!」(今日来ないのは(未だ来ていないのは)明日は雪の如く溶け去るであろう。それなのに、溶けることもないときは、それを花と見るべきや? 返事〜否!)。ついでにいうと、此の業平朝臣の伊勢物語の短歌の正しいテキストは「けふこずは明日は雪とぞふりなまし消えずはあり共花と見ましや」というものです。

Hoffmann の論文の序言によると、Pfizmaier の逐語訳を理解するために原文を読まなければなりません。Pfizmaier は根本的な資料を提供し

ましたが、Hoffmann は此れを用いて体系的に調べて研究しました。そういうふうな研究は Pfizmaier の弱点ですから、日本語の文法を書くこともできませんでした。ロドリゲスの『日本大文典』の批判文の始めにそんな文法を書くつもりだということがあったけれど、実現に至りませんでした。同じように Pfizmaier の歌の研究も翻訳の 2、3 点に過ぎないのです。Hoffmann の『日本語の研究』という本の中における「やまと歌について」という短い論文を読んで、Pfizmaier の関係文献と比べれば、体系的であって分りやすいのは Hoffmann の方です。

処々に Pfizmaier の日本歌学についての業績を批判しましたが、今日の話の終りにその価値をもう一度強調しようと思います。上に述べた Hoffmann の作品を除いて、Pfizmaier の歌論の研究は全然言及されないうで忘れ去られました。しかし、その独訳は、伝統的な日本の詩歌論はどんなものであるか、歌論と文法論はどんな関係があるか、古典の和歌はどのようにして歌の理論に用いられたかという問題について説明しました。ヨーロッパの日本学がまだ若かったので、ほとんど注意されませんでした。学問の先駆者の運命はそうなることがあります。

(注)

SAW=Sitzungsberichte der kaiserlichen Akademie der Wissenschaften,
philosophisch-historische Classe, Wien

DAW=Denkschriften der philosophisch-historischen Classe der kaiserlichen
Akademie der Wissenschaften, Wien